

は、繰返し回数が増加するとともにひずみが大きくなり、軸差応力が大きいほど塑性ひずみも大きくなる。

4. あとがき

本実験装置のシリンダ上室圧力と側圧を各々独立的に制御できるようにすれば、断面積の変化を考慮して軸圧を制御でき任意応力経路下での自動制御が可能である。今後、系統的な試験を行い、繰返し荷重下での過圧密粘土の構成式の妥当性を検討する予定である。

5. 参考文献

- 1) F. OKA, Proc. of IUTAM Symposium on Deformation and Failure of Granular Materials Delft 1982 2) OKA, F. Proc. 10th ICSMFE, Stockholm, vol.1 pp215-218, 1981 3) 龍岡文夫, 生研セミナーテキスト, コース71, 1981 4) 中井照夫, 私信 (名古屋工業大学) 1985 5) Y. P. Vaid and D. Negussey, Soil Mechanics Series No.70 Dept. of Civil Engng. The Univ. of British Columbia Vancouver 1983

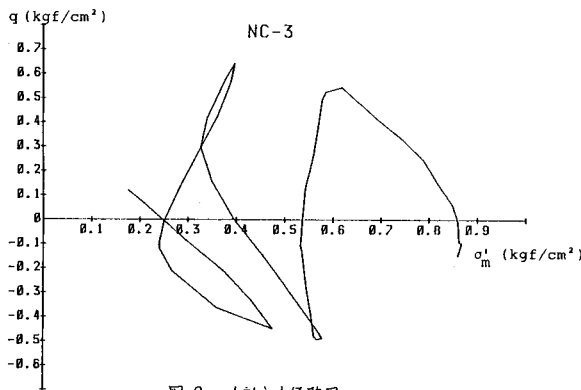


図-2 有効応力経路図

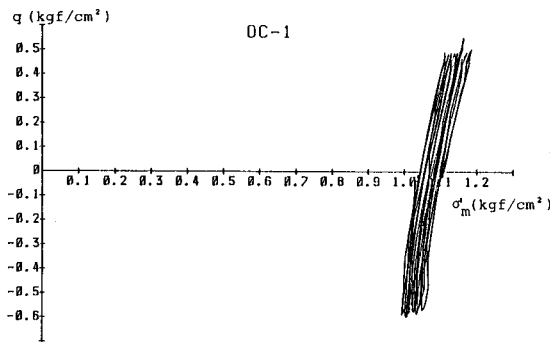


図-3 有効応力経路図

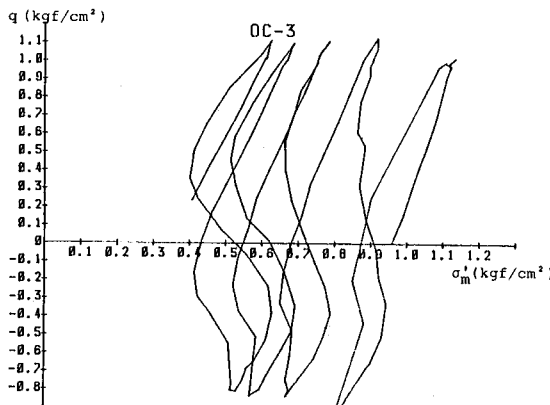


図-4 有効応力経路図

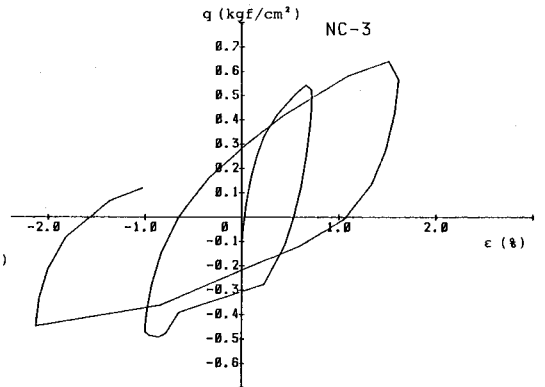


図-5 軸差応力～ひずみ関係

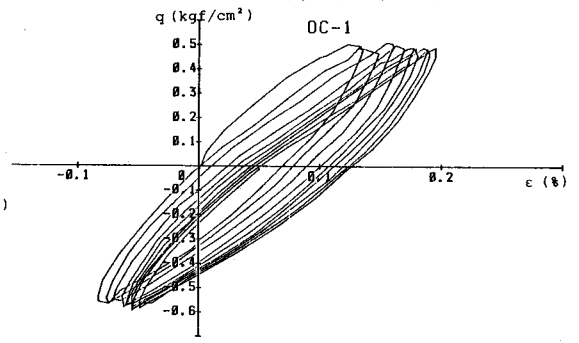


図-6 軸差応力～ひずみ関係

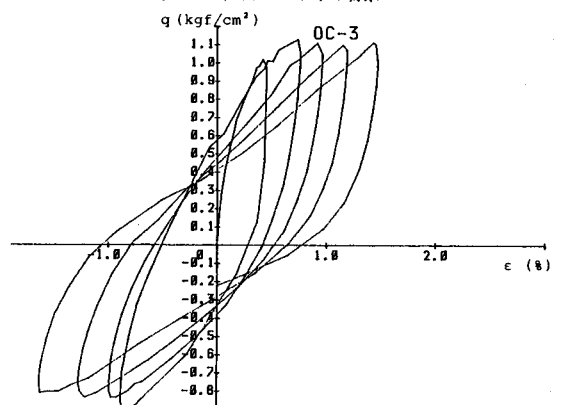


図-7 軸差応力～ひずみ関係